



一寸先は光

漫画家 やなせたかし

「一寸先は闇」という言葉がありますよね。たしかに突然に不幸はやってくる。ましてはくらのような漫画家とか絵本作家とか芸能人は二種の潜在失業者で、人気落ちればただのひと、明日の運命は予測できない。浮草稼業です。人気がある時は普通のサラリーマンより収入は多いし、チャホヤされる。得意満面、人気は永遠に続くと思いがちであるが、予告もなしに或る日突然消える。

病魔におそわれて倒れたらそれでおしまい。まさに一寸先は闇だけれど、この闇を光におきかえてみると意味が逆転する。

明日を信じて生きることになる。実はこの「一寸先は光」という言葉は漫画界の先輩杉浦幸雄先生の造語です。杉浦先生は二種のオプチミストだった。

老境になっても足もとが危なくなっても銀座のバーで遊んでいた。「ぼくは楽天主義だ。エビキュリアンでいい。人生を楽しみたい。一寸先は光だ、絶望はしない。」

この言葉は多くの心に沁みた。「一寸先は光」と思うようになってから気分が楽になった。病気がちだったし、下積みの生活が長くていつまで経っても出世作がかけず、陽のささない暗い谷間の旅が続いていたがそれでも「一寸先は光」とつぶやきながら仕事を続けてきた。

かすかな光のようなものが闇夜行路の前途に見えだした時は、既に五十歳を過ぎていた。

アンパンマンがアニメ化されて人気が出てきた時は六十九歳、後期高齢者の年齢に近く、この職業ではぼつぼつ引退を考える年齢である。人生は解らない。一寸先は闇だが一寸先は光でもある。あまり早く人生に絶望しないでほしい。日本の年間自殺者数三万人というのは心が痛む。とにかく生きていれば晩年の幸福というものもある。基本的には人生はさびしい。それならば無理してでもつらいことは忘れて「一寸先は光」と信じた方がいい。



やなせ たかし

1919年高知県生まれ。三越百貨店宣伝部のグラフィックデザイナーを経て漫画家となる。主な作品に、『やさしいライオン』『アンパンマン』シリーズ(フレーベル館)『やなせたかし全詩集 へのひらを太陽に』(北溟社)など。2008年、東京国際アニメフェア2008第4回功労賞を受賞。